宮津市奥波見地区における内発的地域づくりのプロセスに関する研究

三橋研究室　村上幸恵

1. 研究の背景と目的

本学科の生活デザイン演習Ⅲでは「学校の中では見ることのできない地域の生活・自然を学び、地域づくりについて考える」という趣旨でデザインサーベイを行ってきた。そのフィールドである宮津市奥波見地区は戸数わずか 14 の過疎地域である。しかし奥波見には都会ではすでに失われつつある自然と共生する生活や、共同体のつながりなど価値ある「地域の資源」が残っている。そして自然の中でしたたかに生きてきた人々がいる。そんな集落の元気を私達にも分けて欲しい、奥波見にはずっと残っていて欲しいという思いが本研究に取り組むきっかけとなった。

ここでは、サーベイで採集することができた地域の資源を活かして「地域が主人公になる」「地域にあるモノ・人を活かす」「全住民参加を目指す」「エコロジー的健全さを保つ」などの理念のもとに奥波見の内発的な地域づくりに取り組み、そのプロセスを明らかにする。さらにその作業を通して内発的地域づくりの方法論を探ることを目的とする。

2. 研究内容

2-1. 地域資源の総点検

宮津市奥波見地区（全 14 戸）を対象とした 3 年間のデザインサーベイの成果をふりかえることで奥波見の潜在的な資源の総点検を行った。

2-2. 資源の中から「光」を抽出

総点検で採集することのできた奥波見の資源の中から、当該地域に固有の財産、すなわち「光」と呼べるものを抽出し、以下のように分類した。

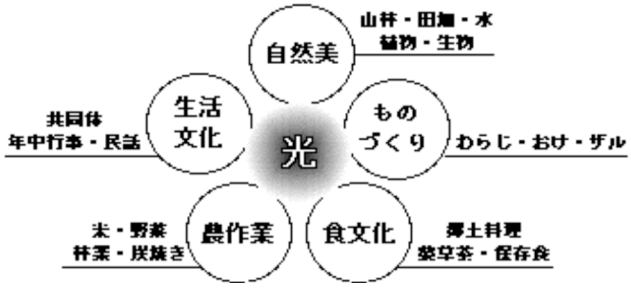

図１　奥波見の「光」の分類

2-3. 住民への「光」の認識度調査

抽出した「光」を活かして内発的な活性化に向けた取り組みを進めていくためには、住民の「光」の認識を高める必要がある。

ここでは３回にわたって住民に対する「光」の認識度調査を行った。

1）自治会長へのインタビュー（00.09.29）
2）婦人方へのインタビュー（00.10.21）
3）全戸アンケート・聞き取り調査（00.12.03）

図２　婦人方へのインタビュー

以上の３回の調査から住民の「光」の認識度に関して以下のことが明らかになった。

サーベイに比較的積極的な層 地域づくりに 関心を持っている層
しかし実際何か行動を起こすまでは至っていない 比較的若い世代の方が多い 「光」の認識度高い
サーベイにあまり積極的でない層 地域づくりに あまり関心を示さない層
「この村のどこがいいのか分からない・・・」 高齢の方が多い 「光」の認識度低い
サーベイに消極的な層 地域づくりに関しては 「忙しくてそれどころではない」層
大規模に農業をされている方が多い 「光」の認知識は中程度

図３　「光」の認識度に関する住民の意識層

このように住民の意識には開きがあり、今後は認識度の高い層に牽引役になってもらう必要があると思われる。

2-4. 活性化に向けた取り組み

奥波見での「光」の実態を考慮し、地域活性化のための取り組みとしてエコミュージアムという手法を提案したい。

エコミュージアムとはフランスのアンリ・リビエールによって提唱された、地域全体を生きた博物館として捉え、住民がその学芸員であるとする理念である。一見エコツーリズムと大差ない理念であるが、エコツーリズムがどちらかというと訪れる側の楽しみを優先しているような印象を受けるのに対し、より「地域が主人公になれる」のがエコミュージアムではないだろうか。

図 4 には奥波見の「光」の総点検により導かれた全住民参加型のエコミュージアムマップを例示した。住民一人ひとりがエコミュージアムの担い手として地域の「光」を認識し、またその価値を発信することが肝要である。

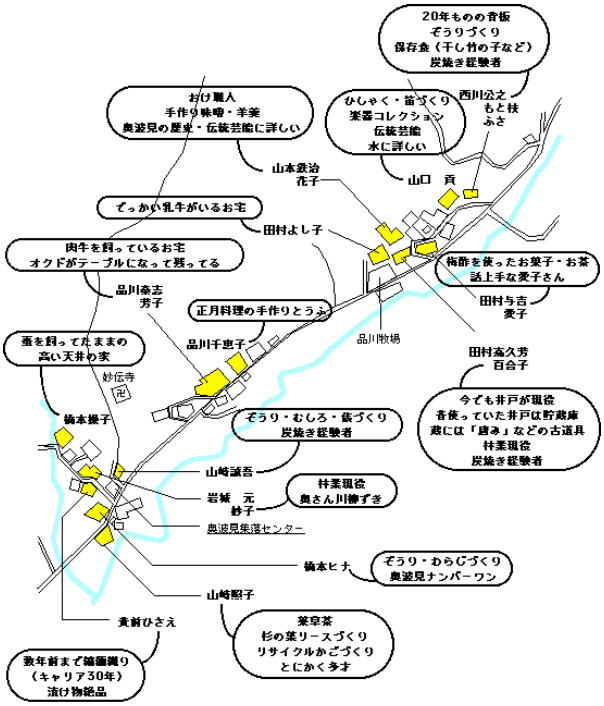

図４　奥波見エコミュージアムマップ

2-5. 内発的地域づくりの方法論

奥波見での取り組みを通して知ることができた内発的地域づくりの実践のための方法論を提示する。

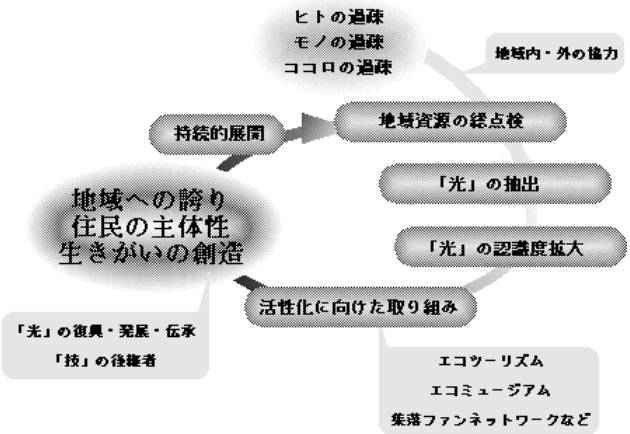

図５　内発的地域づくり実践のためのプロセス

【ヒト・モノ・ココロの過疎】

奥波見は現在戸数 14、バスも通っていない。そうした人口減少・高齢化・生活の不便さが「ここの何がいいのか分からない」という発言に代表される「ココロの過疎」を生み出してきた。多くの過疎地域がこのような状態にあると思われる。

【地域資源の総点検】

本学科のデザインサーベイはまさに奥波見の潜在的地域資源を総点検する作業であった。またこのプロセスは地域に普段ありふれているものに光を当てるという作業である性格上、住民の目だけでは気づかないことも多い。よって、外部の目で見た地域の姿を示すことが大切である。

【「光」の抽出】

総点検で採集することができた地域資源の中から、奥波見に固有の財産になりそうなものを抽出した。磨けば光る資源を選び出す作業と言える。

【「光」の認識度拡大】

本研究では住民への意識調査として住民間の「光」の認識度を調査した。住民の意識を知ることは認識度拡大のために必要である。また、認識度に合わせた無理のない取り組みを企画することが重要である。突然外から大勢の人間を呼んでくればいいというものではない。その前に地域側がココロの準備をしておかなければならない。

【活性化に向けた取り組み】

本研究では奥波見の活性化に向けた取り組みとしてエコミュージアム案を提案した。その他にもエコツーリズムやインターネット上での PR など、その地域の「光」と認識度に鑑みてふさわしい手法を選ぶことが必要である。

【地域への誇り・住民の主体性・生きがいの創造】

住民が地域に誇りを持って主体的に地域づくりに取り組み、なおかつそれが生きがいにつながるという段階は内発的地域づくりの理想の姿である。それでこそ地域が活気を取り戻し、「光」を伝承し後継者を育てるという地点に近づくことができる。

【持続可能な展開】

活性化に向けた取り組みは、イベントを 1 回だけやって終わりというのではなく、末永く続けられるようなものにしなければならない。奥波見のサーベイも１年限りではなく何年も続けてきたことで地域と大学側との新しい関係が築けるようになってきた。

内発的地域づくりとはこれらのプロセスを何度も繰り返し、長い時間をかけてすすめられるものである。

3. 結言

地域づくりは「心おこし」「人づくり」と言われるが、本研究を終えるにあたって正にその通りだと実感している。ココロの過疎から誇りづくりへの道程は長く険しい。今回はそのほんの一端だけでも明らかにできたと思う。

奥波見の地域づくりは大きな循環の軌道に乗り始めたところである。今後は活性化に向けた具体的なシナリオを想定し、それをもとに住民との協同した調査・話し合いをすすめることが課題となる。私たちが学び、伝えたいと思えるような生活をいつまでも残していくために。

【参考文献】

郷田實　「結いの心」ビジネス社　1998

鶴見和子　「内発的発展論の展開」　筑摩書房　1996

宇野重昭、鶴見和子　「内発的発展と外向型発展」　東京大学出版会　1994

保母武彦　「内発的発展論と日本の農山村」　岩波書店　1996

農山漁村文化協会　「日本的グリーンツーリズムのすすめ」　2000

平野の町づくりを考える会　「おもろいで平野」　和泉書院　1995

日本デザイン学会　デザイン学研究特集号「地域の『華』づくりとデザイン」　1994

【参考URL】

地球デザインスクール　http://www02.so-net.ne.jp/~earth-d/

地域づくり百科　http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/

いい過疎地ネット　http://www.e-kasochi.net/

農村ファン倶楽部　http://www.nouson-fun-club.gr.jp/nouson.html

むら&まち交流協会　http://www.kcn.ne.jp/~tproject/index.html